

[学術論文]

フーコーと「批判」

——「批判」としての考古学と系譜学——

Foucault and “Critique”; Archeology and Genealogy as “Critique”

松 野 充 貴

Mitsuyoshi MATSUNO

Studies in Humanities and Cultures

No. 21

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 21号
2014年7月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JULY 2014

[学術論文]

フーコーと「批判」

——「批判」としての考古学と系譜学——

Foucault and “Critique”; Archeology and Genealogy as “Critique”

松野 充 貴*

Matsuno, Mitsuyoshi

要旨 本稿の目的はミシェル・フーコーの哲学におけるイマヌエル・カントの批判（概念）の役割を明らかにすることである。従来のフーコー研究ではフーコーとカントの関係はモダンとポスト・モダンの論争の枠組みのなかで論じられてきた。それゆえ、フーコー哲学とカント哲学は対立するものとして捉えられてきた。しかし、2008年に生前未公開だった『カントの人間学』が出版され、フーコーのカント解釈が明らかになり、フーコーとカントの関係を見直さなければならなくなった。なぜならば、フーコーは『カントの人間学』のなかで、自らがこれから歩む哲学的企図をカント哲学と関係づけながら論じているからである。そこで、本稿はまず『カントの人間学』におけるフーコーのカント解釈を論じる。次に、『臨床医学の誕生』においてフーコーがニーチェの試みを『純粹理性批判』と対比して論じていることに着目し、フーコー哲学におけるニーチェとカントの関係を考察する。最後に、「啓蒙とは何か」のなかでフーコーが自らの探求を批判（概念）と論じていることに依拠しながらフーコーとカント哲学との関係を論じる。

キーワード：フーコー，カント，ニーチェ，人間学，批判

1. はじめに

現在、『狂気の歴史』（Foucault 1961）から始まるミシェル・フーコーの一連の試みと批判哲学の関係を論じることはそれほど珍しいことではない¹。フーコーは最晩年のテキスト「啓蒙とは

* 名古屋市立大学 人間文化研究科 博士後期課程

¹ 例えば、手塚博『ミシェル・フーコー 批判的実証主義と主体性の哲学』、Colin Koopman “Genealogy as Critique; Foucault and the Problems of Modernity”、Marc Djaballah “Kant, Foucault, and Forms of Experience” などがある。また、2014年に出版された “The Cambridge FOUCAULT LEXICON” のなかにも「カント」という項目があることから、フーコーとカントの関係はフーコー研究において、近年ますます重要性を増していることを例証しているように思われる。

何か」(Foucault 1984)において自らの哲学的企図について論じている。その哲学的企図は批判哲学であり、考古学と系譜学をイマヌエル・カントの批判(概念)²に對置させている。

従来のフーコー解釈では、フーコーはポスト・モダンの代表的論者とされており、カント哲学とは全面的に對立すると考えられていた。例えば、杉田によれば、フーコーは『言葉と物』(Foucault 1966)において「カント人間学を…激しく攻撃した」(杉田 1996 p.31)とされている。それゆえ、フーコーが「晩年になってカントを好意的に扱ったことは人々を当惑させるには十分であった」(杉田 1996 p.31)と解釈されている。おそらくこのような解釈はフーコーがニーチェに強い影響を受けていることに由来しているのであろう。

しかし、フーコーとカントの関係を對立的に論じることはどれほど説得的であろうか。フーコーは1961年の博士副論文『カントの人間学』においてカントの『人間学』の領域において批判を確立することはできないだろうかと論じ、考古学の着想をカント哲学に得ている。

そこで本稿は『カントの人間学』におけるフーコーのカント解釈を論じ、次に系譜学と批判の関係性を明らかにし、最後に「啓蒙とは何か」における批判とカントの批判の関係を考察することによってフーコー哲学における批判哲学の役割を明らかにする。

2. フーコーによる『人間学』の解釈

『カントの人間学』におけるフーコーの論考はカント哲学の全体のなかで『人間学』がどのような位置を占めているのか、及び『人間学』とはいかなる学なのかを明らかにするというものである。フーコーが『人間学』に焦点を当てた理由は人間学の講義がケーニヒスベルグ大学において約二五年間おこなわれたからである。フーコーによるとこの二五年間は「初期の探究が終わり、批判が始まり、カントの思想の三部から成る均衡に発展して、ついにはライプニッツの回帰とシュルツェの懐疑論とフィヒテの観念論に対する防衛の体系の成立にいたる、その二五年間を『人間学』は封じ込めて」(AI p.12/p.15) いる³。つまり、フーコーによれば、人間学の探求は批判以前に始まり、批判以後も続けられた試みであり、カント哲学の道程を把握するために重要な著作なのである。それゆえ、フーコーは『カントの人間学』のなかで、『人間学』と『批判』⁴および超越論哲学の関係が論じている。とはいえ、本稿の目的は批判とフーコーの哲学の関係を明らかにすることであるから、『カントの人間学』の全てを考察することはない。以下では、フーコーによる『人間学』の解釈と『人間学』と批判の関係を中心に論じる。

まず、検討しなければならないのは『人間学』の特殊な位置づけである。カントは『純粹理性批判』の「純粹理性の建築術」において哲学の体系について論じている。「純粹理性の建築術」

² 本稿において批判は与えられた学的事実を前提としてその可能性の条件を問うこと、および有限性を踏査することを指す。

³ 引用のなかの「三部から成る」は『純粹理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』を指す。

⁴ カントの三批判を指す。

のなかで純粋哲学と経験哲学は区別される。フーコーによると、「一見したところ、純粋哲学と経験哲学のあいだに厳密な対称性はない」（AI p.46/p.90）。それゆえ、人間学が「純粋な認識にかかわる批判によって指示されたり、管理されたりすることはない」（AI p.46/p.90）。なぜならば、予備学としての批判は純粋哲学に関わるものであり、経験哲学である人間学は批判の予備的考察を必要としないからである。だからこそ、フーコーは『批判』と『人間学』の対応は「容易に読み取れるが、明示的に示されることも考察の対象とされることもない」（AI p.46/p.90）と論ずるのである。したがって、純粋哲学とは異なる哲学である経験哲学固有の特徴を明らかにしなければならないだろう。

経験哲学である『人間学』に固有の傾向とはどのような特徴があるのだろうか。カントは『人間学』を「日常的いとなみの書であって理論の書でも学校の書でもない」（カント 1798/2003 p.12）と位置づけている。また、『人間学』の序文では世界知を探求することがその目的であると論じられる。カントによれば世界知とは人間を知ることが目的とした知である。カントはさらに『人間学』の領域を限定している。カントは人間知の探求は二つの方向でなされると論じる。生理学的見地における人間学と実用的見地における人間学である。『人間学』の正式な題名が『実用的見地における人間学』ということからもわかるようにカントは実用的な人間学を探求したのである。カントによれば実用的な人間学的探求は「人間が自由に行為する生物として、自分自らを形成するのか（実用実践）、または人間になす能力があるがゆえになすべきものは何か（道徳）、の研究に向かう」（カント 1798/2003 p.11）。したがって、『人間学』のなかで論じられる主体は『批判』で論じられる純粋で自由な主体ではなく、可変的で流動的な主体として人間は現われることになる。また、人間学的考察には純粋哲学とは異なる特殊な前提が存在する。人間知の探求は「仲間との交際を通して、事前に故郷で人間知を獲得しておかねばならない」（カント 1798/2003 p.13）。この前提によって、『人間学』において文化や言語は所与のものとして機能することになる。つまり、『人間学』において探究される人間とは世界知（文化や言語）の網目のなかに自分自身の位置を定め、その中で自己自身を変革してゆくものとして論じられるのである。それゆえ、フーコーは人間学的考察を「人間が世界を獲得するやりかた（世界の認識ではなく、世界の使用＝慣用）の分析」（AI p.33/p.60）、つまり、文化を実践している人間の分析であると同時に、「世界が人間に強いる諸々の命令や規則についての総合、すなわち人間がそれにもとづいて自身を形成」（AI p.33/p.60）するような総合になると論じる。

まとめておこう。『人間学』において論じられる人間とは博物学的に人間の本性を定義することによって人間を「^{ホモ・ナトゥーラ}自然の人間」として論じるものでもなければ、形而上学的な「純粋な自由の主体」として論じられるものでもない。「すでになしとげられた諸々の総合のなかにとらえられており、その総合によって世界に結びつけられている」（AI p.34/p.61）ものとして人間は現れるのである。このような特徴が『人間学』に固有の傾向なのである。

次に、フーコーは「体系的」⁵と「大衆的」⁶という『人間学』の特徴に着目する。フーコーは「体系的」という特徴は『人間学』の第一部「教訓論」に対応し、「大衆的」という特徴は第二部「性格論」に対応しているという。「人間学が体系的と言われるのは、そのまとまりを批判的思考が示した全体から借りているからなのだ。「教訓論」に収められた三編がそれぞれ三つの批判を反復する一方で、「性格論」は人類の生成と到達不可能な諸目的への歩みをあつかう歴史論をあらためてとりあげる。ここに、そしてここにだけに人間学の編成原理は存在する」(AI p.55-p.56/p.111-p.112 強調は引用者)⁷。

先述のように、フーコーによれば『人間学』が「体系的」なのは「『人間学』は『批判』の構造に即し、それを反復するある構造をそなえているから」(AI p.58/p.117 強調は引用者)である。しかし、この反復は『批判』の探究で明らかになったものを『人間学』の領域に当てはめることではない。フーコーによれば『批判』と『人間学』には重要な差異がある。それは、「『批判』が受動性と自発性の関係のなかにおかれた規定として語ったものを、『人間学』は決して終わることもなければいつ始まったわけでもない時間的な散逸に沿って記述する」(AI p.58/p.117)。つまり、『純粋理性批判』において、「時間は総合の能動性に対して透明だった」(AI p.57/p.114)のに対し、『人間学』の流動的な次元では、時間は総合の活動を散逸させ、総合の活動を「不分明で不透明なものにする」(AI p.57/p.114)。例えば、『批判』において時間は内感の形式であった。それゆえ、「我惟う」の純粋主体には時間は流れてはいなかった。それに対して、『人間学』の経験的な主体における総合の活動は継起の形をとる。したがって、『批判』の領域とは異なり経験的な領域に属する『人間学』は時間によって散逸を運命づけられているのである。このことからフーコーは「人間学にとってもっとも重要なものは、どんな場合にも、遠くから高みから時間によって包み込まれている」(AI p.58/p.117) ことであると論じる⁸。

『人間学』の二つ目の特徴は「大衆的」である。「大衆的」である『人間学』はカントが論じるように特殊な前提が存在する。『人間学』を探求するためにはあらかじめ人間知を人々との交際を通して獲得しておかねばならなかった。したがって、『人間学』は人間学的探求にとって必

⁵ カントは『人間学』の序文において『人間学』は「体系的」であることを繰り返し論じている。しかし、カントは「体系的」という語の定義をしていない。

⁶ 『人間学』では「populär」であり、フーコーは「populaire」と訳している。フーコーによれば『人間学』が「大衆的」なのは「読者は人間の個々の何らかの特性を自分のテーマとして取り上げ、その観察の結果を人間学を構成する部門のなかに提供」(カント1798/2003 p.15) することができるからである。

⁷ フーコーは「すべて Alles」と「ひとつの全体 eine Ganze」について論じている。フーコーの解釈では『批判』は一つの閉じられた体系である。なぜならば、『純粋理性批判』はわれわれの認識の限界を明らかにする試み、領域確定の試みである。それゆえ、『純粋理性批判』において私たちが認識可能なものとされたものしか『人間学』は論じないのである。つまり、フーコーの解釈では『人間学』に反復される批判的思考とは領域確定された体系的思考なのである。だからこそ、『人間学』は時間によって散逸することを運命づけられているにもかかわらず「体系的」なのである。

⁸ 以上のことから、フーコーの解釈ではカントの思考において超越論的なものと経験的なものが混同されることはない結論づけることができる。カントは超越論的に明らかになったものを経験的なものとしては論じなかったのだ。認識でさえ経験ヴァージョンと超越論的ヴァージョンが区別されているのである。だからこそ、フーコーは『言葉と物』において「人間(＝経験的・超越論的二重体)」は「カントがともかくもその分割を示した、経験的なものと超越論的なものとを、あらかじめ、ひそかに混ぜ合わせていたのである」(MC p.352/p.362)、と論じるのである。カントの思考において『批判』は経験的に反復されるのである。

要なもの（人間知）を内包していることになる。

そして、フーコーは「大衆的」という特徴を「この円環をほどくことなく、与えられたままに、…この円環が与えられている場、すなわち、言語において」（AI p.60/120）受けとらなくてはならないとしている。なぜならば、言語という場は言語を語ることと、言語について語ることが「同じひとつの運動のなかに存在する」（AI p.60/120）からである。すなわち、フーコーの人間学的考察の解釈は「構成されたものであると同時に包み込むものである記号の体系のなかで、その記号についてなされた考察」（AI p.62/p.124）なのである。ここに、一般的なカント解釈とフーコーの解釈に決定的な断絶が生じる。フーコーは「生命——経験と科学」と題されたテキストにおいて、フランス哲学の二つの伝統を論じている。経験、意味、主体の哲学と、知、合理性、概念の哲学⁹の対立である。一方に、ジャン・ポール・サルトル、モーリス・メルロ＝ポンティの系譜があり、他方に、ジャン・カヴァイエス、ガストン・バシュラール、アレクサンドル・コイレ、ジョルジュ・カンギレムの系譜がある。フーコーはカントの『人間学』、特に第二部「性格論」を主体の哲学ではなく概念の哲学に引きよせて解釈しているのである。

非主体哲学として解釈された『人間学』の導きの糸となるのは言語である。人間学的考察とは「ある主題についての様々な言語形式を汲み尽くし、それぞれの正確な意味と現実的な領域の広がりやをさだめようとする辛抱強い努力にほかならない」（AI p.60/p.121）。問題となるのは言語（あるいはそれによって表象される観念）と実在の関係である。だからこそカントは「愚者 Tor」と「阿呆 Narr」、「いかれた男 Geck」のそれぞれの概念の広がりを探求するのである。つまり、「性格論」は日常的な言語の網の目の考察なのである。フーコーはここにカントが導入した一つ的前提を強調する。「言語が屈曲を見せるところには必ずなんらかの意味の特殊なあらわれがあるという前提」（AI p.60/p.122）である。したがって、フーコーによれば「愚者 Tor」と「阿呆 Narr」、「いかれた男 Geck」という言葉の差異は博物学者が立てる動物の分類に対応するのである。

以上のことから、『人間学』とは「慣用表現の総合研究」（AI p.61/p.122）のようなものであるとフーコーは結論づける。人間知とは日常の生活のなかに見出される知であった。日常生活におけるわれわれの言語使用は学術的な使用とは同じではない。学術的な使用は言語を吟味し、正確な使用を志向するのに対し、日常言語はそれほど正確に使用されるわけではない。『人間学』は意味が正確に画定されていない言語の分析なのである。だからこそフーコーは『人間学』においては「どんな出来合いの言い回しにも真剣にとるべき重みがある」（AI p.60/p.122）と論じているのである。また、フーコーは人間の習慣が論じられていることにも注意すべきであるという。社交場のエチケットや社会的習慣、礼儀作法が出来合いの言語に相当し検討されているのである。そ

⁹ 「概念の哲学」およびフランス現代思想における「概念の哲学」の重要性については、近藤和敬『数学的経験の哲学——エピステモロジーの冒険』、金森修編著『エピステモロジー 20世紀のフランス科学史』を参照せよ。

れゆえ、慣用表現の総合研究とは「言語と実践の糸をたどり、その双方をじっくり検討し、経験界の区画めいたものに即して相互につきあわせる」(AI p.61/p.123) ことによっておこなわれる。

さらに、フーコーによれば『人間学』はドイツ語という「表現と経験の特定の体系に根ざしている」(AI p.62/p.124)。すなわち、『人間学』は地理的・言語的に限られた領域についての考察でしかないのである。哲学がラテン語から離脱したことの重要性をフーコーは「この離脱によって、哲学的な言語はある所与の国語を起源の地とし、探索の領野とすることができるようになる」(AI p.62/p.128) と論じる。そのことによって、ドイツ語でなされた哲学的考察はドイツ語の領域のなかに位置づけられることになる。「そこで、国語は問われるべき体系としてではなく、むしろひとが最初からその内に置かれているような自明な地平として与えられている」(AI p.62/p.128) のである。だからこそ、言語の網の目(あるいは文化)は世界として論じられるのである。

フーコーが『知の考古学』において「アルシーヴ(語られたものの領域)」を分析することが考古学の目的であると語るとき、それはカントの人間学的思考と無縁ではないだろう。

カントは所与の国語の固有の領域において語られた言説を考察の対象とした。それに対し、『言葉と物』におけるフーコーは博物学的言説、生物学的な言説といったそれぞれの学問に固有な領域において語られた言説について探究したのである。しかし、二人の思想家には決定的な違いが存在する。「ユダヤ人がどうして事業に才覚がありそれを好むかについての注を除けば」(AI p.61/p.123)、『人間学』には歴史的な説明はない。一方、フーコーは『批判』のように特定の「アルシーヴ」が出現する可能性の条件を明らかにしようと試みる。つまり、「歴史のア・プリオリ」を探究するのである。フーコーの探求において「アルシーヴ」は時間とともに散逸する流動的なものとして論じられる。なぜならば、人間学の「体系的」という特徴が明らかにするテーゼとは、『批判』の次元とは異なり、経験的な領域は時間によって散逸を運命づけられているというものだったからである。また、「大衆的」という特徴は世界を言語の網の目として思考されるからである。つまり、時代とともに散逸する言語の領域およびその散逸の条件を問うことこそがフーコーの試みだったのである。その時、条件は歴史的なものになる。なぜならば、現代の世界を構成する条件と古典主義時代の世界を構成する条件は異なるからだ。つまり、フーコーの考古学は条件づけるものと条件づけられるものとともに流動的なものとして論じるのである。

フーコーは『カントの人間学』の最後において経験的な領域において「批判を考えることはできないだろうか」(AI p.79/p.161)、と自らがこれから歩む哲学的企図について論じ、筆を擱いている。

3. ニーチェと批判

『カントの人間学』から二年後、フーコーは『臨床医学の誕生』の序文において、ニーチェの

試みは批判であると論述している。「われわれの時代は批判の時代であることにまちがいあるまい。…カントにとっては、批判の可能性と必要性は、いくつかの科学的内容を通して、知識が存在するという事実に結びついていた。今日では言語学者としてのニーチェが証明するように、この批判の可能性と必然性は、言語活動が存在するという事に結びついている」（NCI 1963/2011 p.xii/p.18）¹⁰。

言語活動と批判はいかなる関係にあるのだろうか。それは『道徳の系譜学』の第一論文の第六節において明瞭に現われているように思われる。ニーチェはそのなかで清浄と不浄の対立を例にあげながら実在と言語の関係、概念の変遷について論じている。ニーチェによれば清浄と不浄は「身分差別のしるしとして対立する」（ニーチェ 1887/1993 p.385）。しかし、古代人の概念では清浄なものとはたんに「肢体を洗い、皮膚病をまねくようなある種の食物を自らに禁じ…血を忌み嫌うものにすぎなかった」（ニーチェ 1887/1993 p.385）。ここで、ニーチェが問うていることは概念の転化（意味の転換）がおこるのだろうかというものである。ニーチェによれば概念転化は語が象徴的な意味を帯びることによって生じる。つまり、古代人の概念は単なる事実を意味するものでしかなかった。それゆえ、言語と実在は非象徴的で直接的な関係にある。しかし、概念転化が起こると言語は価値によって象徴的な意味を帯びることになる。したがって、『道徳の系譜学』において問題だったのは語の象徴的な意味はどのような価値体系において意味を獲得することになったのかを問うことであった。だからこそ、ニーチェは「われわれは道徳的諸価値の批判を必要とする、これらの諸価値の価値そのものがまずもって問われねばならぬ、——そのためには、これらの諸価値を生じせしめ、発展させ、推移させてきたもろもろの条件と知識が必要である」（ニーチェ 1887/1993 p.367 強調はニーチェ）、と論じるのである。

人間学的探究と系譜学的探究を比較してみよう。『人間学』のフーコーの解釈において人間学的探究は所与として見なされ、自明の地平として現われている世界知（言語および実践の織りなす網の目）についての分析と、世界に住まい自己を構成する人間についての考察であった。それに対し、系譜学的探究は自明の地平の探求であると同時に、自明の地平を構成している諸価値の価値についての探求である。それゆえ系譜学は自明の地平の可能性の条件を問う批判となる。なぜならわれわれは所与（世界知）を通して事物を認識しているのであるから、それを探求すること、またその所与を構成する価値を探求することは認識の様態を明らかにすることになるからである。

しかし、ニーチェは批判を超越論的な領域において行なうのではない。『人間学』と同様に経験哲学である。系譜学的探究は「実際の歴史」のなかで行なわれる。人間学的考察は日常的な領

¹⁰ ドゥルーズによればニーチェの試みは「カント主義の根源的変形、カントが構想したと同時に背きもした批判の再考案、新たな基底に立ち新たな概念をともなった批判的企ての再開、これこそがニーチェが探究した…と思われる事柄である」（ドゥルーズ 1962/2008 p.111）。また批判と系譜学の関係については、「ニーチェは『道徳の系譜』において『純粋理性批判』をやり直したかったのだ」（ドゥルーズ 1962/2008 p.178）と論じている。

域において言われたこと、行なわれたことが対象であったのに対し、系譜学的考察の根拠は「典拠をあげうる事実、現実に確証できる事柄、実際にあった事実」（ニーチェ 1887/1993 p.369）である。

フーコーは「ニーチェ・歴史・系譜学」においてニーチェの歴史の用い方について論及している。フーコーによれば歴史家たちが論じる歴史には超歴史的な観点が導入されている。「歴史家たちの歴史は時間の外に支点をこしらえている。そういう歴史は黙示録の客観性によってすべてを裁くのだとなえる。しかしそれは歴史が、永遠の真理、不死の魂、つねに自己との同一性を持ち続ける意識を想定したということである」（DE I/IV p.1014/p.25）。つまり、歴史家たちは不動の必然性に支えられた歴史を論述するのである。これに対し、ニーチェの系譜学は「いかなる恒常性にももとづかないという点で、歴史家たちの歴史と区別される」（DE I/IV p.1015/p.25）。先述のように系譜学は歴史的資料にもとづいており、探究の目的は諸価値の変化を可能にした諸条件を明らかにすることである。それゆえ、系譜学者にとって問題となるのは歴史の連続性ではなく不連続性、転換なのである。このことは系譜学的批判が明らかにするものを特徴づける。カントの批判的方法とは与えられた事実を前提としてその可能性の根拠を問うことである。同様に、系譜学的批判も与えられた事実（歴史的資料）にもとづいてその可能性の条件が問われる。しかし、歴史的な事実から探求を始めるがゆえに条件づけるものと条件づけられるものは共に歴史的で流動的なものとして論じられるのである。したがって、系譜学的批判は歴史的に局在化されたものとして論じられるのである。それゆえ、ニーチェの試みは批判の歴史化と呼べるのではないだろうか。

4. フーコーのエートスと批判

フーコーは最晩年のテキスト「啓蒙とは何か」において自らの試みを歴史的な存在論と呼び、自らの哲学を要約している。以下ではフーコーの要約にしたがいながらこれまでの議論と比較する。

このエートスは、一つの〈限界的態度〉として性格づけることができる。それは、拒絶の態度ではない。ひとは、外と内との二者択一を脱して、境界に立つべきなのだ。批判とは、まさしく限界の分析であり、限界についての反省なのだ。しかし、カントの問題が、認識を超えることを諦めるべき限界とはどのようなものかを知ることにあつたとすれば、今日における批判の問題は、積極的な問いへと反転されるべきだと、私には思われる。私たちにとって、普遍的、必然的、義務的な所与として与えられているものの中で、単独で、偶然的、そして、ある種の恣意性にゆだねられているものの占める部分とはどのようなものなのか、と問うべきだ。要するに、必然的な制限のかたちで行使される批判を、可能な乗り越えのかたちで行使される実践的批判へと、変えることが問題なのだ。（DE

II/X p.1393/p.19)

フーコーによると批判とは限界と関わるものである。カントの試みは、われわれの認識の普遍的構造を明らかにする試みであると同時に、われわれの認識の限界を明らかにするものであった。これに対し、フーコーの批判は境界を侵犯することであるという。それでは境界の位置づけとはどのようなものだろうか。この境界は乗り越えられるべき境界である。つまりそれは、カント的な二元論の境界ではない。したがって、超越論的なものと経験的なもの間にある境界ではなく、経験のうちにある境界である。経験のうちにある境界とはどのようなものだろうか。それを理解するためには考古学的探究の言語と実在の関係を論じる必要があるだろう。フーコーは考古学的考察において「問題なのはまさしく、「物」をなしで済ませることなのだ。物を「脱現前化する」こと。物の豊かで重々しく直接的な充実、習慣的に一つの言説の原始的な法則とみなされているものの充実を、払いのけること」（AS p.68-p.69/p.94）である。つまり、古代人の概念のように実在と言語は緊密な関係ではない。問題なのは実在と意味の方向性を決めるエピステーメー（＝知の認識論的台座）あるいは装置（＝権力と知の布置を決定するシステム）を探求することなのである。それゆえ、フーコーはニーチェが価値という概念によって説明したものをエピステーメーあるいは装置として明らかにしようと試みるのである。そして、エピステーメー／装置は限界を構成している。なぜならば、フーコーにとってわれわれはそれを通してしか世界を認識できないのだから。したがって、境界を乗り越えるとは今あるエピステーメー／装置から別のエピステーメー／装置へと移ること、それゆえ知の新たな様態を産出すること、あるいは知の可能性を拓くことである。これは以下の結果をもたらす。

〈批判〉は、普遍的な価値を持つ形式的構造を求めて実行されるものではなく、私たちが行うこと、考えること、言うことの主体として、私たちを構成し、またそのような主体として認めるように私たちがなった由来である諸々の出来事をめぐって行われる歴史調査として批判は実行される、というものだ。この意味において、この批判は、超越論的ではなく、形而上学を可能にするという目的を持つことがないのだ。この批判は、その目的性においては、〈系譜学的（*généalogique*）〉であり、その方法においては、〈考古学的〉なものだ。〈考古学的（*archéologique*）〉である——超越論的ではない——というのは、この批判が、あらゆる認識、あらゆる可能な道德の普遍的な構造を解明することを求めるのではなく、私たちが考え、述べ、行うことを分節化している、それぞれの言説を、それぞれに歴史的な出来事として扱うことを目指すという意味においてである。この批判が〈系譜学的〉であるというのは、私たちが行いえない、あるいは、認識しえないことを、私たちの存在の形式から出発して演繹するのではなく、私たちが今のように在り、今のよ

うに行い、今のように考えるのではもはやないように、在り、行い、考えることができる可能性を、私たちが今在るように存在することになった偶然性から出発して、抽出することになるからだ。(DE II/X p.1393/p.19-p.20)

まず、カントの批判と比較してみよう。『純粹理性批判』の試みは認識の可能性の条件を問うというものであった。それに対し、フーコーの試みはわれわれの思考や実践が今在るようになった可能性の条件を問うというものである。例えば、フーコーは『知の考古学』において考古学は「歴史的ア・プリオリ」を明らかにする試みであると論じている。フーコーが「歴史的ア・プリオリ」という語によって論じようとしているのは「諸判断の妥当性の条件」(AS p.174/p.242)ではなく、諸言表の出現、変換、消滅の条件である。それゆえ、考古学は「諸言表が出現するための諸条件、それらが他の諸言表と共存する際に従う法則、それらの存在様式の種別的形態、それらが存続したり変換されたり消え去ったりする際に従う諸原理」(AS p.174/p.242)を探求するものである。つまり、世界(言語の網の目)の探求であると同時に、網の目を編成する原理あるいは条件についての探求なのである¹¹。そしてその言説の網の目は所与として与えられており、われわれはその世界を通してしか物事を認識することはできない。したがって、言説の可能性の条件を問うということは同時に認識の可能性の条件の探求なのである。しかし、『性の歴史 I 知への意志』までのフーコーは主体を宙づりにし、『カントの人間学』における世界(言語の網目によって構成された世界、経験的であるがゆえ流動的であることを運命づけられている世界)と世界を編成する原理(流動的な世界からその条件を導くゆえ、その原理自体歴史的である原理)の考察を中心に行っていたのである。

われわれがフーコーのカント解釈に同意できるかどうかは本稿の対象ではない。本研究において重要なのはフーコーのカント解釈からフーコーにおける批判哲学の重要性を明らかにすることである。これまでみてきたようにフーコーはカント的批判、つまり可能性の条件を問うことと有限性を踏査することを『人間学』の領域において、したがって、条件づけるものと条件づけられるものがともに歴史的なものとして論じられる批判を試みたのである。だからこそ、イアン・ハッキングはフーコーの試みを「カント哲学の歴史化」(ハッキング 2002/2012 p.6)と論じ、フーコーを「カントの直系」(ハッキング 1999/2006 p.99)に属していると位置づけるのである¹²。このようなまなざしからフーコーの思想体系を再解釈することが次の課題である。

¹¹ ドゥルーズによれば「歴史的ア・プリオリ」は可視性と言表可能性によって構成される。「話すことと見ること、あるいは言表と可視性は純粋な〈構成要素〉、ア・プリオリな条件であり、この条件のもとで、ある時点で、あらゆる観念が形成され、様々な行動が現われるのである。このような条件の探求は、フーコーに特有な一種の新カント主義を構成する。…可視性が、その諸条件とともに一つの〈受容性〉を形成し、そして言表は、その諸条件とともに〈自発性〉を形成する」(ドゥルーズ 1986/2007 p.113)。したがって、フーコー哲学ではカントにおける感性を可視性が担い、悟性を言表可能性が担うのである。カント哲学と考古学の詳細な比較、検討はいずれおこなわなければならない。

¹² 重田園江(重田 2014)はフーコーの「深いところで脈動しつづける、一貫した問いあるいはテーマ」(重田 2014 p.104)を明らかにする導きの糸となるのは「カントと近代性」(重田 2014 p.104)であると論じ『カントの人間学』から『言葉と物』、『監獄の誕生』を経て「啓蒙とは何か」とフーコーのカント解釈について考察している。

参考文献

フーコー著作一覧

- [NCI] FOUCAULT, Michel, 1963, *Naissance de la clinique*. Press Universitaires de France (=2011, 『臨床医学の誕生』, 神谷美恵子訳, みすず書房)
- [MC] FOUCAULT, Michel, 1966, *Let mots et les choses*. Gallimard (=1974, 『言葉と物』, 渡辺民一・佐々木明訳, 新潮社)
- [AS] FOUCAULT, Michel, 1969, *L'archéologie du savoir*. Gallimard (=2012, 『知の考古学』, 慎改康彦訳, 河出書房)
- [DE I] FOUCAULT, Michel, 1994, *Dits et écrit tome I 1954-1975*, Gallimard (=2000, 『ミッシェル・フーコー 思考集成 V』, 蓮實重彦・渡辺守章監修, 筑摩書房)
- [DE II] FOUCAULT, Michel, 1994, *Dits et écrit tome II 1976-1988*, Gallimard (=2002, 『ミッシェル・フーコー 思考集成 X』, 蓮實重彦・渡辺守章監修, 筑摩書房)
- [AI] Kant/FOUCAULT, 2008, *Anthropologie d'un point de vue pragmatique, precede de FOUCAULT Michel, intoroduction à l'Anthropologie de Kant*, Librairie philosophique J.Vrin (=2010, 『カントの人間学』, 王子賢太訳, 新潮社)

その他文献

- Djaballah, Marc, 2008, *Kant, Foucault, and Forms of Experience*, Routledge
- ドゥルーズ, ジル, 1962/2008, 『ニーチェと哲学』, 江川隆男訳, 河出文庫
- ドゥルーズ, ジル, 1986/2007, 『フーコー』, 宇野邦一訳, 河出文庫
- Hacking, Ian, 1978, 'The Archaeology of Foucault', *FOUCAULT; A Critical Reader*, David Couzens Hoy(ed.), Blackwell
- ハッキング, イアン, 1999/2006, 『何が社会的に構成されるのか』, 出口康夫・久米暁訳, 岩波書店
- ハッキング, イアン, 2002/2012, 『知の歴史学』, 出口康夫・大西琢朗他訳, 岩波書店
- 金森修編著, 2013, 『エピステモロジー 20世紀のフランス科学史』, 慶応義塾大学出版会
- カント, イマヌエル, 1798/2003, 『カント全集15巻 人間学』, 坂部恵・有福孝岳他訳, 岩波書店
- カント, イマヌエル, 1800/2001, 『カント全集17巻 論理学』, 湯浅正彦他訳, 岩波書店
- 近藤和敬, 2013, 『数学的経験の哲学——エピステモロジーの冒険』, 青土社
- Koopman, Colin, 2013, *Genealogy as Critique; Foucault and the Problems of Modernity*, Indiana University Press
- Lawlor, Leonard・Nale, John, 2014, *The Cambridge FOUCAULT LEXICON*, Cambridge University Press
- ニーチェ・フリードリッヒ, 1887/1993, 『ニーチェ全集 10巻 善悪の彼岸／道徳の系譜学』, 信太正三訳, ちくま学芸文庫
- 重田園江, 2014, 「フーコー——公共性と倫理への問い（カントを読むフーコー）」, 『岩波講座 政治哲学 5 理性の両義性』, 小野紀明・川崎修他編, 岩波書店
- 杉田敦, 1996, 「啓蒙と批判——カント・フーコー・ハーバーマース」, 『法学志林』, 93(3)
- 手塚博, 2011, 『ミッシェル・フーコー 批判的実証主義と主体性の哲学』, 東信堂

(研究紀要編集部は、編集発行規程第6条に基づき、本原稿の査読を審査委員に依頼したところ、審査委員から掲載可とする判定があったので受理した。2014年6月21日付)